

現地レポート

民主的社会主義者 マムダニ氏がNY市長に

若者・草の根の行動が変化を起こす

アクティビスト ロニ・ザハヴィ・ブラナー

2025年11月に行われたアメリカ・ニューヨーク市長選で、反トランプ政権を掲げる民主的社会主義者のゾーラン・マムダニ氏が勝利し、世界に衝撃を与えました。どんなとりくみが勝利にむすびついたのか。選挙運動に参加したロニ・ザハヴィ・ブラナーさんに寄稿してもらいました。



訪問活動に出発する若者たち。後列右端が筆者

10万超のボランティア「語りたくなる」政策

ニューヨーク市長選挙の候補者を決める民主党内の予備選挙に向けた1年前の調査で、ゾーラン・マムダニの支持率は1ヶ台台でした。政界の既成勢力と大富豪がこぞって敵対し巨額のお金が出る中、勝利の見込みはないと思っていまし

たが、11月の寒い夜、友人たちと見守る中、ゾーランは次期ニューヨーク市長に当選したのです。私は毎週土曜日、ブルックリン中を歩いて家々を訪問しました。この勝利は、ようやく認められ、たたかう価値のあるビジョンを与えられた若者たちによって築かれたものです。

私はブルックリンに住む若者で、多くの友人同様、典型的とみなされている存在です。若者たちはやる気も興味も失っており、投票に行かせることは不可能だ、と。私たちはそうならざるを得なかった。ほとんどの政治家が示してきたのは、現状維持重視の防衛的政治や「よしまし」論ばかりです。払えない家賃や企業の権力、新イスラエル団体のアメリカ・イスラエル公共問題委員会(AIPAC)によるロビー活動の影響など、私たちが懸念を抱いている問題をまともに取り上げてきませんでした。ニューヨーク市の家賃が高すぎて暮らせないのは人生



投票日の夜、仲間たちと勝利を祝う(左から2人目が筆者)

ロニ・ザハヴィ・ブラナー：イスラエル出身、ユダヤ系ニューヨーク市民、ブルックリン在住。気候正義アクティビスト。ニューヨーク州ピースアクションで大学コーディネーターをつとめたほか、ダイベスト(投資撤退)運動など草の根の行動を組織。

怒り、孤独を抱える若者
共通の使命感で動いた

選挙運動は、ガザ攻撃に抗議する大学占拠の直後に勢いを増しました。若者たちの行動が主流派によって執拗に中傷され、犯罪視され、非難されたその瞬間に、火がついたのです。多くの若者がキャンパスでの何カ月にもわたる草の根抗議行動で疲弊し、怒りを抱えて選挙運動に加わりました。

今までの教訓は、世界中の政治家に注目してもらいたい。それは、若者は徐々に改良すればよいという漸進主義や恐怖しか提示されなければ、離れる。大胆で、価値観に基づくビジョンとそれを実現する役割を与えられるれば立ち上がる。組織し、勝利するのです。

ゾーランは本当にこの町に住む人々のためになるプランを掲げてたか、10万人を超えるボランティアがそのプランを語りたという強い思いで加わりました。高騰する家賃、多額の負債や終わりのない戦争、有権者のことより献金者の権力を維持することに熱心な今の政治体制など、私たちの暮らしに決定的な影響を与える物質的・道徳的危機を直接取り上げたビジョンを示したからです。

この若者たちは歴史上もつとも孤独な世代です。最近のギャラップ社による調査では、35歳以下のアメリカ人男性の4人に1人がいつもさびしいと感じています。男性が最も深刻な被害を受けていますが、若者の疎外感は広くまん延しています。ゾーランの選挙運動はそうした孤独感への解毒

剂になりました。公園に集合し、活動が終わるとバーに集まり報告し合う。選挙運動で出会ったカップルもいます。数百万都市での選挙運動が、共通の使命感で動く親密で目的のある集団をつくったのです。

今後の大きな課題は、選挙運動で培った人々の力をどう生かしていくかです。ゾーランは不可能なことを実行できる規格外の異端児などではなく、私たちが傷つけているシステムを告発し、ともによりよいものを想像しようと呼びかけました。彼の勝利は、市民が中心となった政治が機能することを証明しています。しかし、真の勝利は、選挙運動の最後の看板が撤去されずと後にも、私たちが相互扶助と集団としてのエンパワメントという精神を持ち続けているかどうかにかかっています。まだ勝ち取るべき世界が残されているからです。

ニューヨーク州ピースアクションのゾーラン支持バナー

パレスチナの解放をめざす運動と躊躇なく連帯する、数少ない政治家の一人であるゾーランに引き付けられたのです。

エンパワメントの精神
どう持ち続けるか

母の歴史

聞き書き
大分県 諫元正枝さんのお話 (6)

新婦人日田支部結成(1963年)以来、とりくんできた運動と仲間づくり。新婦人の「5つの目的」を学習し、一人ひとりの要求を班づくりに実らせてきました。

「子育てが大変、教育とは…」の要求に応えて、中央本部作成のスライド『幹を育てる』(1975年)と幻灯機を自転車に積んで夜の学習会を組織。その後、懇談会をして全員入会、そして班の誕生です。

「食品公害が心配」と学習会や添加物検出実験をひろげ、下郷農協との産直運動と現地見学で会員を増やしました。



日田支部結成の日、呼びかけ人としてあいらずる諫元さんに、特別養護老人ホーム増設、子ども医療費無料化などと、粘り強い運動で実らせました。サテライト日田(競輪場)を反対運動で中止(2003年)させたことも、忘れられません。

願い束ねて新婦人の「会」づくり

第1回日田地区母親大会は、1955年、第1回日本母親大会に尽力した高田なほ子さんをお招きし、地域婦人連合会、中島ミニ実行委員長のもと開催。その後第3回まで続きましたが、左寄りの会との抗議で中止されました。1965年、全国的には第11回日本母親大会の年に日田地区では再開第1回母親大会を開催し、2016年まで50回続け、私は事務局長と実行委員長を務めました。つく